

【高校在学中のトビタテでの留学体験】

私は高校2年生の時に、トビタテ留学 JAPAN！高校生コースの国際ボランティアに合格することができました。返済不要の奨学金且つ、行きたい国や期間を全て自分で選べるという最高の条件だったので、「せっかくならできるだけ遠いところに行ってみよう」と思いました。そして、アフリカのガーナ共和国で3週間のボランティアをしながらホームステイをすることを決意。活動内容としては、託児所で算数や英語、歌などを教えたり、家造り（主に土壁を塗る作業）のお手伝いです。実際に現地に行ってみて、私がその国や地域に与えられるインパクトは限りなく小さいですが、そこで得た経験は今でも私の人生に影響を与え続けています。例えば、メディアや学校で教えられる「途上国の印象」と、実際に現地に滞在して見えてくる「途上国の印象」は、時々乖離していることを実感しました。もちろん、深刻な貧困問題や環境問題を抱えているのは事実ですが、それ以外にも豊かな文化や、美味しいご飯、陽気で思いやりに溢れた人達がたくさんいることも事実です。頭でっかちな大人ではなく、実際に自分の足を動かして事実を見極められる、そんな人になりたいと思えたのも、この経験があってこそです。



【高校在学中のそのほかの留学体験】

高校在学中に、私はタイに2回行きました。1回目は、ガーナからの帰路で、たまたまタイがトランジット先だった時です。その時にタイに魅了され、1年後には念願のチェンライというタイ北部の町でのホームステイ（2週間）をしました。そこは、たくさんの山岳民族の方々の故郷で、自分たちの受け継がれてきた文化や自然とともに生きる姿、家族や仲間を一番に愛す姿が印象的でした。彼らと過ごす時間はほんとうに豊かなものでした。一方で、西洋化によって大切な文化が少しずつ失われているのを、今の日本と重ねて、とても切なかったのを覚えています。改めて、私たち日本が昔から受け継がれてきた文化や価値観をもっと知りたい、もっと大切にしたい、と思うようになりました。



【卒業後の進路】

高校卒業後は、アメリカにあるニューヨーク州立のコミュニティカレッジに進学しました。アメリカを選んだ理由はたくさんありますが、その中の一つとして「マイノリティとして生きる」とはどういうことなのかを身をもって経験したかったからです。私は人種差別問題に強い関心を抱いているのですが、ずっと日本に暮らしているのでは当事者の気持ちを理解することはできないと思っていました。実際、私がアメリカに住んでいた時には、アメリカ大統領選の最中で、多様性を尊重する風潮と、それを排除する風潮がせめぎ合っている時期でした。あきらかに私がアジア人であるということを馬鹿にしたジョークを言う人もいましたが、当時は英

語力が足りず、ただ笑って誤魔化すことしかできなかったのは、とても悔しかったです。でも、それよりも私の中身を見て、支えてくれる人達に出会えたことは何よりも支えだったし、私の人生の財産です。違いを尊重し、誰もが安心して胸を張って生きられる社会を作っていきたい、という想いがいっそう強くなりました。



アメリカのコミュニティカレッジ卒業後は、コロナ禍ということもあり日本に帰ってきました。そして自分の進路を改めて考え直すため、1年間マザーハウスというアパレルブランドでインターンシップをしました。きっかけは、高校生の際に読んだ山口絵里子さんの著書、「裸でも生きる」でした（とてもおすすめなので、ぜひ読んでみてください！）。マザーハウスでは、途上国の可能性に光をあてたモノづくりをし、世界に通用するブランドを目指して走り続けている素敵な会社です。山口さんの、「世界の不条理を変えていきたい」という強い想いに共感して集まった、たくさんの大人たちや同期のインターン生たちと一緒に働けた日々はとても濃密でした。

今後の予定としては、今年の秋にカナダにある大学へ編入する予定です。無限にある複雑な社会問題たちを、さらに紐解いてアプローチしていく道を探りたいと思います。

【在校生へのメッセージ】

コロナ禍で、思うようにいかないことが増え、悔しい思いをしている人も多いと思います。そんな中でも、できることを精一杯やっていたら必ずチャンスは舞い込んでくるので自分を信じて頑張ってください！！自分の人生の責任をとるのは自分自身なので、先生や親、友達のアドバイスを大切にしつつも、最終的には自分が一番ワクワクする道を進んでいってくださいね。